碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可
神奈川　碩心会　発行

59年4月号（141号）
発行者
根岸岳萃
編集
中村愛岳

59年4月現在会員数	
逗子地区	151名
葉山地区	299名
大船地区	67名
（合計）	（517名）

靖国神社参拝の折に聞いた吟声

あの時の感動

堀内支部C　高梨　良風

編下げの髪にセーラー服・黒い靴下に黒い靴、そんな姿で友達と靖国神社の例祭に参拝し、通り抜けて麹町三番町に出た時、ある一角の家より、力強く朗々と吟じている声が聞えてきました。少しばかり漢文を習っていた私達にそれが詩吟である事が分り、深く心に泌み感動したものでした。当時の女学生の音楽といったら〝流浪の民・四つ葉のクローバー・ローレライ〟のようなもので、詩を吟ずる事等思いもよらぬことでした。

それから幾年か過ぎ、子供五人も大学を出、それぞれの道に進み、親の許より離れて行った時、長い間胸に秘めていたあの時の感動を思い出し、今は逗子の方にお越しになりました加藤蒼風さんの奥様にお話ししましたところ、今晩お稽古日なので是非…ということでお供させて頂き堀内教場に参りましたのが小峰桜岳先生との出合いでした。ほんの見学のつもりで参りましたが、先生は折角来たのだから一吟と申され、戸惑いましたが、此の道を選んだ以上はと自己流の「九月十日」を吟じました。先生は私に恥をかかせぬ様褒めて下さいましたが、恐縮の至りでした。

仲々軌道に乗らず、目が覚めては思い、時には工夫したり、又裏の畑で声を出して練習もしました。先生は常々大きな声を腹から出して、内に引かず外に声を出し、作者の気持と味を出す様、親切な御指導ぶりです。

そうした練習をくり返しながら十年余を過し、去る二月二十六日、八段の審査を受けさせていただきました。何年経ってもあがり気味で後悔が残りましたけれど、最後の御説明で全員合格の有難いお言葉に嬉しい思いで帰路に着きました。

過日中村幸岳先生宅に許証料をお持ち致しました節、色々と慰め励ましのお言葉を頂き溜飲が下りました。思えば今日まで、十指に余る諸先生方の温い御指導・そして先輩、同志の思いやりのある御協力に深く感謝し、奥深い無限大の吟に心を、そして味も出して生命の許す限り続けて行きたいものと念じております。どうぞ今後共よろしくお願い申しあげます。

奥伝合格（四月一日付）

おめでとうございます

160 森　貞風
181 祐野孝風
191 堀口桂風
193 西ケ谷秀風
194 加藤愛風
195 田中宗風
196 宇都宮徳風
197 宇都宮雅風
198 鷲山秋風
201 田中容風
202 高島久風

奥伝審査を終えて

松和支部　田中　容風

私達仲間が詩吟を始めました時、三井先生から「皆さん五年間は辛抱して下さい」とおっしゃった言葉が強く耳に残っており、その為に今日まで続けてこられたものと思っております。何時の間にか七年も御指導を頂いた事になり、さっぱり上達致しませんのに今回奥伝の審査に挑戦致しましたわけですが、間際になっての猛練習で、思うように出来ないまま審査場に参りました。

私達の前に五、六段の方々の吟を伺い、皆様大変お上手な事に驚き、今更になって自分の未熟さが悔まれ、恥かしく思われました。落ち着くよう心にいゝきかせて壇上に上りましたが、緊張し、胸がどきどきして詩の文句を忘れる有様で誠に赤面の至りでございました。しかし、終りましたあとは何か一つやり遂げたと云う気分で、これも良い修業と有難く存じております。

尚審査後の講評で、熟語とアクセントの正しい使い方について御話がありました。私は茨城県の出身ですので、地方なまりとアクセントの違いに苦労しておりますので非常に勉強になりました。奥伝審査の中からだけでも次の様なものがありました。

天と点・捲くと撒く・富士と藤・春と張・晴れと腫れ・断つと立つ

審査を終え、思うがままに書きましたが、これを機に又励みたいと思っております。

碩心会支部別会員一覧表（59.4現在）

地区	支部名	会員数	指導者名
逗子地区151名	逗子A	42	根岸・石津・一柳・金指
	逗子B	8	三井
	桜山A	14	三井
	桜山B	14	広瀬
	沼間	21	三井・松野・清水
	山ノ根	9	三井
	銀詠	15	千葉(剛)・千葉(香)
	真澄	14	村田
	葉月	14	広瀬
葉山地区299名	堀内A	25	根岸・佐葉・石渡
	B	10	加藤(圭)
	C	5	小峰
	D	20	中村(幹)・中村(優)
	E	9	白井(寿)・白井(鶴)
	F	16	矢島
	横誓	11	小形
	一色A	26	鈴木(幹)・守谷
	一色B	25	加藤(相)
	星山	15	黒崎
	上原	24	伊藤
	唐木山	14	寺脇
	平松	12	行谷
	下山口	16	沼田・沼田(義)
	吟甫	11	沼田・渡辺
	長柄	12	竹石
	諏訪	12	井沢
	上山口	9	秋元
	滝の坂	16	上村
	風早	11	杉山
大船67名	大船A	18	根岸・立沢
	大船B	26	三井・森田・田上
	大戸塚	7	鈴木(幹)
	松和	16	三井・下条・木村
計	(28支部)	(517)	(指導者42名)

●碩心会第九回温習会

とき・六月三日(日)9時30分～16時30分

ところ・逗子図書館ホール

●県本部三十周年記念吟道大会

とき・七月二十九日(日)9時40分～17時40分

ところ・県民ホール（二千五百名収容）

出吟人員・葉山地区百十名
逗子大船地区八十名

出吟題数・葉山地区（男合吟(1)）（女合吟(1)）
逗子・大船地区（〃）（〃）

出吟料・五百円（弁当・プログラム・記念品付）

元碩心会々長

板倉龍風先生を偲ぶ

会長　根岸　岳萃

三月二十日、元会長板倉龍風先生（91才）が亡くなられました。先生を知る人は少ないと思いますので、先生の思い出を気の付くまゝに記してみたいと思います。

碩心会が昭和十二年、松井岳洋先生によって創立されたことは、既に大方ご存知の事と思いますが、昭和三十年、県本部が発足すると同時に、碩心会も、戦前からの会員三名と、準会員の私とで、現在の逗子会館の元の建物の二階の五十畳敷位の片隅で松井先生の指導を受けていました。（当時の県本部は会の数は六支部、会員数一八九名で、私の所属していた横修廠吟道会の会員約五十名も含まれています）

其の後県本部傘下に続々新しい会が出来てきましたので、碩心会も時勢に遅れまいと、昭和三十二年、新聞に折込広告したり、松井先生に募集広告を書いて戴いたりし、横修廠の表記板倉龍泉（龍風）根岸基泉（清岳）高橋碩風さん等に移籍して戴き、約十名で再出発した時を、再建と銘打って参りました。

当初松井先生に会長に就任して戴きたかったのですが、総本部の役職にあるということで辞退されましたので、ご年配といゝ、人格者としても適格で、又逗子にも縁のある板倉先生に会長に就任して戴きました。そして昭和四十年まで、再建後の初代会長として色々会務の面倒をみて戴いた次第です。

当時の教場は、現在の逗子教場の処にあった消防団の詰所で、ダルマストーブを囲んで煙にむせながら練習しておりましたが、一番先に来て鍵を開けるのが会長の板倉先生で「会長とは鍵を開ける役ですネ」と云われたことを、今も鮮明に覚えております。昭和三十六年二月の小雪が降っていた寒い夜、その頃流行っていた〝マチコ〟編みのショールに首を埋めて、小林紫舟（紫風）先生が女性第一号として入会されましたが、吟道と併せ始められた詩舞に、根岸（清岳）小峰（桜岳）さんらも加入され、碩心会全体で紫舟会を応援するような格好になりました。板倉先生もよく小林先生宅を訪ね、小林先生宅に同居していた姪子さんの気立てに惚れられ、自分の長男の嫁さんに迎えられましたから小林家と板倉家とは姻戚関係になります。

先程逗子に縁があると申しましたが、話を変えて、逗子の延命寺に軍用犬〝那智号〟の銅像のあったのを記憶されていられる方もあると思います。この那智号は、満洲事変の折、匪賊に攻められ壊滅寸前の独立守備隊が、何度伝令を出しても本隊と連絡がつかなかった時、敵弾飛来の中を、無事本隊との連絡に成功して、壊滅を救ったということで、新聞にも大きく報じられ、銅像の出来たときは、逗子の町中をあげての祝賀行事を開いたそうですが、その飼主が板倉陸軍大尉で、或る時その話を板倉先生に話したところ、それは自分の弟ですよと云われ驚きました。又板倉大尉の奥さんが逗子女学校で英語の教師をしておられましたので、会員の方にも教わった人がいるのではないでしょうか。……等々が逗子に縁があったと申し上げた次第です。

先生は戦前重慶に駐在武官としておられ、世界第二次大戦の折には、予備役海軍大佐の司政官としてニューギニアに従軍されましたが、〝峨眉山月歌〟〝早発白帝城〟或いは武漢三鎮等、地図を書いて説明して戴いたことなど、私の吟道勉強に大変有意義でした。

昭和四十年、少し足が不自由になられたので、夜間の外出も思うにまかせず、会長を三井雲岳先生にゆずって退会されましたが、昨年逗子病院で、長柄支部の舟渡さん

と同室になられ、舟渡さんを見舞に行かれた多くの碩心会の方々と、お話しになられたのも因縁でしょうか。ご冥福を心からお祈りいたします。

合　掌

練吟メモ

教本の編集は大変だと思います。第一巻の15ページを見て下さい。まず始めに吟題と読み下し詩文が掲げてあり、その左にやや小さく〔本文〕と〔通釈〕があります。

◇〔本文〕は原文どおりですが、読み下し詩文は、常用漢字表にある字は常用漢字に直してあります。詩文中独・辺・余・万の四字がそれです。なお、結句の遠・送は常用漢字で、本文の漢字とはしんにょうが違います。

◇作者名は、第一巻では常用漢字表にある字は直してあるが、第二巻からはすべて個有の字になっています。例えば（頼山陽）は、第二巻からは個有の（頼山陽）となっています。このページに直接関係ないので、その他の例は省略します。

◇詩文は、七言・五言・律ごとに年代順に配列してあります。

◇ぐっと細かくなりますが、読み下し文の振仮名は秋（しゅう）流（りゅう）式であったのを、第二巻からは（しゅう）（りゅう）式のルビに改めてあります。（通釈）では（すっかり）（しまった）等々になっていますネ。

教本の編集者も印刷製本屋さんも二種の活字で大変ですネ。

◎新支部誕生

（一色B支部より独立）

支部名　平松支部
指導者　行谷佳風
支部長　鈴木蒼泉

475 佐藤恵泉
476 斉藤誠泉
477 斉藤昌泉
478 行谷隆泉
479 吉田芳泉
490 鈴木蒼泉
531 沼田光泉
580 石川栄子
581 松井マス
591 風戸八郎
599 加藤春吉（新入会）大川　清

（移　籍）

右の中十一名は一色Bより平松へ

（入　会）

615 大川　清　葉山町一色五三〇―九一（平　松）
616 神河イソ　葉山町木古庭一四一二（下山口）
617 新倉　勇　葉山町上山口一三九九（下山口）
618 新倉　康　葉山町上山口一三九九（下山口）
619 田中又三　葉山町一色二五一―一九三（堀内B）
620 川村郁子　葉山町堀内一七七二（堀内A）
621 加藤由枝　葉山町堀内二五一（堀内A）
622 槇田孝雄　横浜市磯子区峰町六二〇（大船B）
623 石井郁子　逗子市逗子三―三―二七（葉　月）
624 石井武文　逗子市逗子三―三―二七（葉　月）
625 神尾よ志子　逗子市逗子一―九―一五（桜山B）
626 坂入　正（再）横須賀市追浜町二―五五（吟　甫）
627 井出幸子　葉山町一色一―六―三一（星　山）
628 森　章子　葉山町長柄二―六―二（堀内F）

（退　会）

206 鈴木深山（堀内D）
357 山川洋子（堀内E）
395 高橋清治（一色B）
445 加藤堯子（風　早）
453 高橋敬治（一色B）
487 新倉賢一（星　山）
582 綿貫菊子（一色B）